

三千大千世界

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

世親菩薩、大乘修多羅真實功德に依つて、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。（『入出二門偈』）

この真實功德に依つてということは、『淨土論』に「我依修多羅真實功德相」とあるように、やはり真實功德「相」に依つてということです。それから『淨土論』の中には、「第一義諦妙境界相」とあります。その「相」ということです。

世親菩薩の根本教学は唯識論です。そうすると唯識の教学を通して『無量寿經』に相應しようというのが世親菩薩の教学です。だから「相」ということを言うのです。そうすると、「我修多羅、真實功德の相に依つて」（『淨土論』）とは、つまり真實功德の相を説かれた修多羅に依つてということです。真實功德というのは阿弥陀仏です。阿弥陀仏の真實功德相を説きたもうた釈迦牟尼仏の修多羅に依つて、それから「願偈を説いて總持して、仏教と相應す」（『淨土論』）とあるように願偈を説く。こういう意味があるのです。世尊の修多羅に依つてこの『願生偈』を説いて、そして『願生偈』をもつて修多羅全体の精神を總持して、世尊の教へと相應したい。そのためにこの『願生偈』を作ったのだ。こういうことが一番初めに置いてあるのです。唯識の教学を通して、その『無量寿經』の精神に相應したい、こういうようなことが言つてあるのです。

唯識教学であるから、「五念門」という行が『浄土論』には説かれています。『入出二門偈』というのは、浄土に入出する門ということですが、これは五念門ということです。五念門とは、礼拝門・讃嘆門・作願門・觀察門・回向門、これを五念門と言います。こういう一つの実践実行の組織が説かれているのです。この中にある觀察ということが大事なのです。この觀察とは、この場合は無論、浄土を觀察することですけれども、そういう浄土というものが心を離れてあるわけではありません。一心ですね。世親菩薩においては一心であり、如来としては願心です。願心莊嚴ということが出てくるのです。そういう如来の願心というものを離れて浄土ということがあるのではないのです。

世親菩薩は唯識の論家ですけれども、唯識で論が立たないから願心莊嚴というわけではないのですね。それでは願心莊嚴という言葉は出ないのではないかと思うのです。とにかく唯識の教学では「相」ということが非常に大事な意味を持っているのです。ただ真実功德と言わずに「真実功德相」と言う。だから「相」ということを觀するのです。「相」という字は、「性」という字に対してあるのです。「性」という字に対して「相」という言葉がある。唯識の学問であるから、こういうことが非常に厳密なのです。同じ菩薩でも龍樹菩薩の場合と違って、天親菩薩の教学では、唯識の「相」とか、唯識の「性」とかということを使うのです。そうすると唯識の性相を觀する。こういうことなのです。「相」とか「性」とかということが非常に大事な概念になるのです。

言葉は皆さんでも多少分かるかと思います。「相」というのは姿ということです。かたちとか、姿とかというような意味ですね。それから「性」というのは、これは「自性」という言葉があります。本来という意味ですけれども、本来の自性ということです。「性」というのは「そのもの」ということです。「そのもの」ということを表すのが「性」ということです。

「相」というのは姿ということですが、「性」には形がない。姿や形はないのです。しかしその姿や形のないものの姿や形なのです。それを相という言葉で表されているのです。姿や形のないものに姿や形を与えることを莊嚴とい

う。象徴するという意味があるのです。ですから、「第一義諦妙境界相」というのは、これはつまり第一義諦というのが性なのです。第一義諦というのが性であって、その妙境界相ということですね。「第一義諦妙境界相」とは、性と相と合わせて述べてあるのですね。

願心とか信心とか、そういうものは、願心自身や信心自身は形がありません。形のない心の形です。そういうことをここにずっと展開しているのです。形のないものが形をとるといって、何か妙なようにも思えますが、そういうことを精神界というのです。形のないものがたちをとる。そういうふうにして物を見出してくるのを精神界、精神生活と言っているのです。

そこでまず、詳しく見ますと、二十九種莊嚴功德というのは第一義諦妙境界相ですね。二十九種の功德成就をもって莊嚴する、こういう意味です。形のない物が形をとるといって、芸術家が何かを作るように思いますけれども、そういう意味では彼の世界は一つの作品なのです。こういうふうに言えないこともない。しかしそれは芸術の話ではないのです。美術品だけがその象徴というようなものではないのです。芸術品も一つ象徴しているのでしょうか、宗教生活というものは、やはり象徴の意味を持っている。ですから真実功德には、五念門と五功德門というものが出てきます。五念門の実践によって勝ち取られたもの。ただあるものではない。勝ち取られたものなのです。何にもなしにただ棚からばた餅のようにあるものではないのです。ですから、ものの功德はそのものを勝ち取った人にあるのです。だから我々は努力をして得るけれども、得てみれば努力を超えたものなのです。

考えてみると、皆さんは与えられたものは回向と言うし、努力して得るのは自力であると、こういうふうに分り切った考えているようだけれども、そこら辺ももう一つ考えてみなければなりません。努力なしにただ回向ということとを考えると、それは棚からばた餅でもらったものだという話になってしまいますね。そうではないのです。全身全霊をかけて勝ち取った。勝ち取ってみたら自分の努力で勝ち取ったものではない。与えられていたものである。そう

というような経験なのです。ですから、回向ということと勝ち取るということと二面であって、その二面は寝ていたらただ得ていたというようなものではないです。そこに何かは知らないけれども、個人の努力というようなものではないものがあるのではないかと思うのです。五念門の実践は仏道の実践ですから、それは誰が実践したというようなことではないのでしょうか。そういうものによって見出されてきたのです。

礼拝も合掌も、ついやってみたというようなことではないのです。人間が手を合わせるというようなことは、そこにどれだけ深い歴史があるのか分からないのです。それは我々の場合、親から教えられて、寺に入ると自然にこうするというようなものですけれども、こういうようなことは個人の発明したものではないということなのです。つまり人類が宗教というものを求めていった歴史があるのです。そこに生まれてきたものが合掌礼拝することである。我々はそれにあずかって合掌するということを賜っているのであって、祖先の合掌してきた歩みというものが我々の上に出てきているのです。そこにはやはり祖先の悪戦苦闘というものがあるのです。

三帰依文に「人身受け難し」「仏法聞き難し」とあるでしょう。そこに「難」という字がついているでしょう。受け難い身を自分は、いま受けている。聞き難い法を、いま聞くことが出来た。人間に生まれてきたのも、勝手に自分で生まれてきたという意味ではないのです。生まれようと思って生まれてきたものは一人もいない。気がついたら生まれさせていただいた。その意義というものは誰も知らない。生まれたことの意義というものを見出した人が、「受け難し」と言うのです。意義を見出していない人に、受け難いも受け易いも何もないのです。「受け難し」と言えるのは、意義を見出した人なのです。そういうようなもので、聖典の言葉の一人が貴重なものなのです。

象徴といっても何かそういう大きな実践を通じた象徴ですね。芸術家が頭で象徴したというものではないのです。人類の実践なのです。人類の大きな求道なのです。人類が道を歩むのです。そういう歴史によって勝ち取られた功德です。そういうものをもって莊嚴されたのです。「彼の世界」とは、そういう世界なのです。

『教行信証』にも引いてありますけれども、浄土で五念門の行を修行したのではないのです。三千大千世界、つまりこの世界で修行したのです。人間の世界で自証してきたのです。そしてその修行によって勝ち取った功德が浄土というものになるのです。どこか向こうの方で修行して出来たというようなものではない。この我々の住んでいる世界は、よく考えてみると何でもないことに思うけれども、ここに個性ということがある。過去の我々の祖先、道を求めていった人の個性がある。血を流して道を求めていった個性があるのです。それが我々の今日の世界なのです。だからしてこの三千大千世界の気質ほど強いものはない。過去の仏が仏道修行のために血を流された。血に染まっていないところはない。こういうようなところなのです。

この間、講習会がありまして長崎に行ってきました。そこには大谷派の本願寺の教会というものがあるのですけれども、しかし、大体長崎というところはキリシタンなのです。キリスト教には、宗教改革をしたルターという人がドイツにいます。キリスト教の古いカソリックの宗教が腐敗していたということ、そこで抗議し改革したのです。ところがそこでおもしろいのは、そうやって改革したら逆になるのです。その新教の運動の刺激によって、逆に今度はカソリック自身がだめだということで、目を覚ましてきた。おもしろいことですね。自身が目覚めてきたのです。カソリックの歴史というものは、どんな民族の国家の歴史よりも長いのです。私はあそこに伝統の重みというものを感じるのです。カソリックの命の長さは、どんな国家も及ばないのです。そういった意味では不死身なのです。それで墮落してしまつたら命がないというわけではないのです。墮落してしまつてそこに抗議を受けると、それによってまた目覚めてくるということが不死身なのです。墮落しきっていないのです。それからイエズス会という会がカソリックの中に生まれたのです。それは言ってみれば信仰の有志です。それが昔、地中海を航海出来なかつたから、はるばるアフリカの南端を通過して喜望峰を通過して、ペルシャの方を上ってきて、それからインド洋をずっと通つて日本まで来たのです。

そのときの日本は、信長の時代です。来たのはザビエルという人なのですけれども、そのイエズス会の宣教師をバテレンと言ったのです。初めは、信長はその勇気を非常に感心したのです。喜望峰を越えてくるということは、とても軍人とかそういうものが及ぶような勇気ではない、よく来たものだ。ザビエルが偉いと私が思う点がある。ザビエルはマレー半島でヤジロウという日本人に出会ったのです。彼は鹿児島の人です。日本人には、中国人やインド人や、ベルシャ人と非常に違うところがある。日本人は非常に忠誠である。本当にこよなく信じたもののためには命を捨てても惜しまない。その日本人の気質にザビエルは惚れたのです。日本人に感動したのです。こういう日本人こそ将来、イエスの信心、キリスト教の信心を背負ってくれるだろうと、このように確信したのです。ザビエルのそういうところに私は感心するのです。日本は文化の低い国だ、そういう低い文化を持った国に高い文化を持ったキリスト教が教えてやろう、というようなお情けで来たのではないのです。植民地に来るような気持ちで来たのではないのです。尊敬してきているのです。そこが僕は偉いと思うのです。

ザビエルという人は、そういう日本人の気質というものを見抜いたのではないでしょう。信長はそこに非常に感動したけれども、秀吉になってからだんだん墮落したのです。結局、秀吉という人には、何も深い思想などというものはありはしないのです。ただクーデターをやっただけの軍人です。信長はやはり天才ではないかと思えます。もし信長が生きていたら、やはりザビエルという人の勇気に感動したのですから、日本ももっと世界に出かけていっていいでしょう。そういうことが出来たのではないかと思うのです。

しかし、信長は殺されてしまいました。その後、秀吉の時代になって、キリシタンへの弾圧が始まるのです。その時に、京都の一条で捕まって牢屋に入れられていたキリシタンがそこから連れられて、途中で加わった人も含めて二十六人、長崎に送られたのです。そこで二十六人の捕まった人が、十字架に磔にされて殺されたのです。考えてみてください。二十六人が十字架に磔にされて、そして血を流して息を引き取っていった。その中に三人子供がいるので

す。何とか親はとどめさせたいのです。ですから「おまえキリスト教を捨てる。そうすれば助かるから」と、親は説得するのですが、子供は捨てないのです。そしてみんな死んでいくのですが、そこに信者が集まってくるのです。槍につかれて血を流しているところに血を浴びにいくのです。そして、情けないと死んでいくものは一人もいないのです。みんな感激して死んでいくのです。キリストが十字架にかかった。そのように私も十字架にかかり死んでいくことが出来る。キリストは、私に従いたいと思うものは十字架を取ってこい、十字架を取って我に従え、と言っているのです。だから十字架を取ることが出来た。殺されようにはいろいろな殺され方がありますが、しかし十字架を背負って死んでいくという死に方は、これほどありがたいことはない、とみな感激して殺されていくのです。そうすると見ている役人は、自然に殺す方になるのです。罪人として情けないと殺されていくのであれば、悪いことをしたから罰を与えるのだからというかたちで、見ている人間は何も良心に感じませんね。しかし罪もない人間がみな感激して死んでいくのです。そうすると見ている側が犯罪者になってしまうのです。だからもう最後まで見ていられなかったのでしょうか。逃げ出して帰っているのです。それが序の口なのです。その後、弾圧で一番ひどかったのは家康です。秀吉は何も深い考えがなく、ただ侍としてやったというだけです。家康は重厚な人ですから、その分苦しめ方、痛め方もひどいのです。拷問をし、そしてキリストの絵を踏ませるのです。そういう扱いが明治になっても続いていたのです。

岩倉具視がフランスに行つて、そのように国家の力で信仰をねじ曲げるようなことをしては、世界の仲間入りが出来ないぞと言われたのです。そこではじめてやめたのです。フランスまで行かないとそういうことが分からなかった。それほど世の中が変わってきていた。フランスまで行つてようやく、自分たちがやっていることがむちゃくちゃであるということが分かったのです。

この前行った島原というところは、キリスト教の聖地です。あそこは有馬藩ですけれども、たいしたものだったの

です。学校があり、教育があつたのです。キリスト教はラテン語ですから、一般学校でラテン語の教育があつた。それから世界の歴史とか、地理とか音楽とか、一般教養として教えていました。それからもう一つコレッジオというものがあります。今の大学という意味なのですけれども、向こうは神学と哲学ですね。ですからあの当時の島原は、日本最高の文化が栄えていたのです。今はすべてなくなつてしまいました。それだけの高度の文化は 에스파ニアやポルトガルから来た宣教師が伝え、そして学問を教えていたのです。そして日本人の信者を育てたのです。そういう人々がみな殺されてしまった。殺されなくても追放か、もとの国に戻されるか、迫害を受けて信仰を捨てさせられるかしたのです。

その当時、町の全人口のほとんどが殺されているのです。そして今では島原は小さい町になつてしまった。島原ばかりではなく、長崎には平戸とか五島列島とか沢山あります。みんな明治まで隠れキリシタンというものとして居ました。仏教徒の様な顔をしてキリシタンであつた。それから明治になつて長崎の教会が出てきたのです。深く血を流してそこまで伝えてきたのです。

異教徒にとつては、そこは普通の観光地ですが、しかしキリスト教徒にとつては聖地なのです。さきほど三千大千世界というものは、無数の過去の仏たちが血を流されていないところはない、と言いました。それと同じようなことがあるのです。みんな十字架のために血を流してきた。知らないから観光バスに乗つて見物しに来ていますが、そういうことを知らないのです。

それから秀吉は死ぬ時には太閤殿下でした。太閤殿下は英雄なのです。日本人始まって以来の英雄ですけれども、しかしアニマルということも分からない人だつた。このごろよくエコノミック・アニマルと言うでしょう。アニマルという言葉には確かに動物という意味もあるのですけれども、もっと深い意味はたましいを持つていないもの、それがアニマルなのです。人間性の問題です。ですから秀吉という人は、人間というものに理解のない人なのです。力の

上においては英雄ではあるけれども、太閤殿下という人は人間に理解のない人なのです。そこに少し批判を加えてある。

キリスト教の言葉で、王者のことをカイザーといいます。カイゼルですね。「カイザーのものはカイザーへ、神のものは神へ」という言葉があります。この世のものはこの世のものに、神のものは神のものに。そこは全くつながっていないのです。ですから最高の権威、地上最高の力の権威も恐れない、そういう信念ですね。国王だろうが、太閤だろうが、地上の権威、そういうものに恐れないというような信仰の勇氣です。そういう信仰の勇氣をキリスト教は日本に与えたのです。日本人もそういうことの出来る人間だということを証明してくれたのです。日本人もそれだけの位置を持っているということをキリシタンが証明してくれたのです。

弾圧を受けて、彼らは喜んで死んでいったのです。それによって彼の世界が莊嚴されたのです。此の世界で死んで、彼の世界が莊嚴された。莊嚴功德とはそのような意味があるのです。ただキリシタンの場合は違って、何月何日にこのことが実際にあったということがあります。キリストはナザレという村に生まれました。ナザレというのは、ガリラヤという都の横にある小さい農村です。そこに大工の子として生まれたのです。いわゆるイエスが生まれたのですね。しかし法蔵菩薩というのはそういうのとは違うのです。どこで生まれた人ということではない。法蔵菩薩は話です。物語です。キリストの場合は話ではない。事実です。釈迦であればそういうことは言えますが、法蔵菩薩ではそういうことは言えないのです。そうすると一つの話ということになってくる。

さきほどの続きで言うと、二十六聖人の像が飾られている裏のところに資料館がありまして、いわゆるキリシタンのいろいろな遺物がそこに残されています。二十六聖人の像は屋外にあるので明るいのですが、資料館は部屋の中にある。そこには弾圧の歴史の資料が残っているのです。ですからそこには陰惨な空氣があつて、氣分的にも陰惨な氣持ちになるのであまり長くはおれないのです。けれども、資料館から出て、陰惨からさよならというわけにはいかな

いのです。出るだけで陰惨というものを忘れてしまうわけにはいかないほど、陰惨な出来事が捉えられているのです。仏教とは教えのとらえ方が少し異なりますけれども、皆さんもああいう所に行ってみるといいうのも一つの意味ある大切なことですね。信仰とはこういうものであるということを知るためにです。今の仏教があまりにもだらしがない。今の仏教はある意味教養になっているのではないか。文化的になっているのではないか。神仏というものはそういうものではない。仏教はどうやって滅んだかという、保護されたから滅んだのです。徳川家康はキリシタンの力を抜くために、特に本願寺を保護したのです。本願寺を分けて保護したのです。信長はその本願寺に負けたのです。どの侍にも負けなかったけれども、念仏の境涯には負けてしまったのです。そこで徳川家康は「これは容易ではない」ということで、東西に分けて、分けただけでは足らずに保護したのです。それが今日の門徒制度です。宗教というものは保護されると滅んでしまうのです。迫害では滅ばないのです。迫害を受けても信仰というものは滅ばないのです。保護されとかえって滅んでしまうのです。そういうところに一般の文化というものと違いがあるのです。宗教は野性を失ってはならないのです。

浄土真宗ではキリスト教のように迫害を引き受けるというようなことは、あまりありえないですね。キリスト教に似ているのは日蓮宗です。日蓮宗の歴史は迫害の歴史です。迫害されるように日蓮宗は喧嘩していくのです。迫害のことがきちんと『法華経』に書いてあるのです。だから迫害されればされるほど、自分の信仰を証明することになるのです。『法華経』には「末法になって法華経を信じる人間は迫害されるであろう」と書いてあるのです。ですから、日蓮上人は迫害されることで自分の信仰を証明したのです。迫害されるように迫害されるようにしていたのが、日蓮宗なのです。

親鸞はそういうことはなるべく避けたのです。避けたけれども、危害を受けた。避けたけれども最後まで避けられるわけではないのです。ここまでは避けるということがあるのですね。譲れるところまでは譲る。こちらから喧嘩を

売るわけではないけれども、法然上人のように念仏まで捨てると言われてもそういうわけにはいかないのです。そこまでも捨てるわけにはいかないのです。法然上人はそうでした。ですから流罪に甘んじるわけです。流罪にされるようなことをあえて忍んだわけです。

ここは大事なことで仏教の信仰というものは、自覚ということなのです。「仏」という意味は「自覚した人」という意味ですから、本来の仏教というものは自覚道なのです。キリスト教も日蓮宗も信仰ということを言いますけれども、自覚というものはたとえ信仰といっても、信仰の意味が違ふのです。日蓮宗もキリスト教も身を捨てる行為が信仰なのです。行動が信仰なのです。信仰の行為と言いましようか。けれども、親鸞の信仰というものは、善導大師の二種深信にあるように「信知する」ということです。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」として「出離の縁あることなし」と信知すると言います。知るのです。キリスト教などは分からないから信じるのです。どうも頭では分からない、だから私は信じるというようなことです。念仏の方はそうではないのです。分かったことを信じる。分かるから信じる。分かっただけでは信仰にならないのです。真理が分かった、だからこそ、その分かった真理に立つて生きよう。分別を捨てて、分別の自己に死んで、そして分かった真理にそって生きようとする。これが親鸞の信仰なのです。ですからこれは非常に自覚的なのです。自覚というものは押し売りが出来ないのです。だからこそ暴力によって信じさせるというようなことや、暴力によって捨てさせるというようなことは出来ないのです。そういう違いはあるのですね。

話が少し横にそれましたが、キリスト教の方では事実というものを押さえて、事実ということに力を入れています。法然上人の場合では事実というものに関心がないのです。しかし今言いましたように、三千大千世界ということは、それは一つの話かもしれませんが、単なる話ではないのです。非常に深い意味を含んだ話なのです。事実よりもっと深い意味があるのです。事実を言えばかえって臭くなる。例えば、キリスト教で言えばエルサレムが聖地です。猫

の額のように狭いところですが、そこで争って喧嘩していません。それが事実です。仏教はどのような事実を言っているのではないのです。法蔵がどこそこにいるという話ではないのです。法蔵はどこに生まれた人という話ではないのです。全ての人が法蔵に出会って法蔵精神に生きるのです。言ってみれば本当の求道者というものを法蔵で表しているのです。念仏に生きる人間を法蔵菩薩で表しているのです。そういう人があったという話ではない。誰もが法蔵菩薩として初めて人間というものが成り立つのです。どこそこにあつたという力強いようだけれども、狭い。そうではなくて、人間が生きているということが、どこにおいてもそういう意味を持っている。ただ飯を食べて生きているということではないのです。道というものを離れて人間というものは成り立たないのです。もつと言えば本願というものを離れて人間というものは成り立たない。人間がある限りは本願というものに触れていくのです。そしてそこに伝統というものが出来てくるのです。それが歴史の重みです。本願に感激して喜んでいった先人の歴史です。その中に我が目覚めるのです。呼び覚まされたのです。そういう歴史を親鸞は「五念門」として『入出二門偈』で説いたのです。

（本稿は岐阜・慈光会主催の『入出二門偈』の会における一九七六年七月一六日午後の講義を筆録整理したものである。文責編集部）